

---

# 非通知

清音純

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

非通知

### 【Nコード】

N9774B

### 【作者名】

清音純

### 【あらすじ】

歌が上手な少女、美里は幼馴染の純の勧めでオーディションに参加する事になる。緊張する美里に純がかけた言葉とは……。

## （前書き）

この物語はフィクションです

小さい頃から、私は歌を歌うのが好きだった。運動も勉強もそれほど出来る方じゃないけど、歌を歌うことだけは誰にも負けない。そういう自信があった。

私が歌を好きになったのは、幼馴染の男の子の影響だった。名前は純。私より一つ年下で、子供の頃から身体が弱くて病気がちだった。小学校までは毎日一緒に通っていたのだが、中学校に入ってからは何度も入院を繰り返し、結局中学校を中退した。

病気のせいで気弱になる彼を励ますために、私はよく歌を歌う。そんな時、彼はとても嬉しそうにそれを聴いてくれた。

『美里ちゃんの歌は世界一だよ！』

それが、彼の口癖。お世辞だとわかっていても、私はそれが嬉しかった。

私は高校生になって合唱部に入った。顧問の先生は私の歌をとても高く評価し、熱心に指導してくれた。

そんなある日、顧問の先生が私に言った。

『美里、オーディション受けてみない？』

私はその突然の申し出に驚いた。聞けば百人近くが応募するオーディションで、地方のケーブルテレビで生中継するという。正直、私は初め乗り気じゃなかった。受かるわけがないと思ったし、大勢の前で一人で歌うのは恥ずかしい。でも、その日病院で純にこの話をしたら、彼は何故か自分の事のように喜んだ。

『出なよ！ 美里ちゃんなら絶対受かるから！ 僕もテレビで見たいし！』

純のこの言葉にも後押しされ、私は結局オーディションに参加する事にした。

オーディション当日、控え室の中で私の緊張はピークに達していた。周りにいる人達は、いかにもオーディション慣れしているといわんばかりにリラックスしている。気を紛らわせようと発声練習を試みるが、声がかからずほとんど音が出なかった。

こんなので受かるわけない。私は舞台上で声が出ずに笑われる自分の姿を想像し、思わず涙が出そうになった。

そんな時だった。携帯電話からバイブレーターの音が聞こえる。私は携帯電話を手にとって、ぱかっと開いた。ディスプレイには「非通知」の文字。誰だろう、と思いながら、私は通話ボタンを押して、携帯電話を耳に当てた。

「美里ちゃん？ 純だけど」

携帯電話からは、聞きなれた声が聞こえてきた。

「病院から電話してるんだ。今平気？」

「うん……」

今すぐにでもここから逃げ出したい衝動を抑えて、私はなんとか声を絞り出した。純には弱気な姿を見せたくない。いつだって、元気にしてあげられるように、強い私でいなきゃいけない。そんな思いで、私は声が震えないように必死で努力した。

「もしかして、緊張してる？」

純が無邪気な声で私に尋ねる。人の気も知らないで、何楽しそうな声出してるのよ、と内心で文句をつけながらも、私は答えた。

「そりゃ、少しはするよ」

「そうなんだ。でも、大丈夫。僕も今テレビで見てるけど、美里ちゃんよりうまい人なんて一人もないよ！ 絶対受かるから！ 頑張っ！」

純が元気な声で言う。純のこんな元気な声、初めて聞いたような気がした。心の中に温かいものが広がっていく。私の歌を誰よりも知っている彼の言葉に、偽りがあるはずがない。いつものように歌えばいいんだ。そうしたら、純も喜んでくれる。

「任せといて！ 絶対受かるから！」

「うん！ 頑張つて！」

そう言つて、私は電話を切った。いつの間にか、次が私の番になっていた。軽く発声練習を試みる。いつもと同じ私の声が、苦もなく部屋の中に響き渡った。

「結果を発表します」

壇上の中年の男性がマイクに向かって言う。純のおかげで、全てを出し切ることが出来た。結果がどうであれ、後悔はない。

「合格者は、エントリー No 67、片岡美里さんです！」

拍手が沸き起こる。やった、と私は思わず心の中でガッツポーズを決めた。

「おめでとう、美里」

お母さんが私のところへやって来る。隣には純のお母さんもいる。私はすぐにお母さんに尋ねた。

「お母さん、病院の番号教えて！ 合格したの、純のおかげだからお礼を言わないと」

その言葉に、お母さんは何故か隣にいる純のお母さんと顔を見合わせた。

「お母さん……？」

不思議に思つて、お母さんを見る。お母さんは私の両肩に手を置くと、ゆっくりと言葉をつむいだ。

「落ち着いて聞いてね、美里。純君ね、今朝、亡くなったの」

「……………え？」

一瞬、何を言っているのかわからなかった。だって、そんなはずがない。あの電話がかかってきたのは昼過ぎだった。その時、私は確かに純の声を聞いたのだ。

「嘘だよ！ 私、昼間に純と電話で話したもん！」

抗議する私を、お母さんは困ったような哀れむような複雑な顔で見つめた。

「美里ちゃん……ごめんなさいね……。あの子、美里ちゃんの歌が

聴きたい、歌が聴きたいって、何度も何度もそう言っ……」

純のお母さんが涙を流して、顔を両手で隠しながら言う。とても冗談なんかには見えない。それでも、私は必死に言葉を絞り出した。「だって……テレビで見てるって言ってた！ 私の歌、誰にも負けてないって！ 私の歌も聴いてたはずだよ！ テレビで見てたはずだよ！」

「そうだね……」

お母さんが涙声で答える。でも、これ以上、現実から逃げる事は出来なかった。目の奥が熱くなって、胸が痛くて、苦しくて、喉がからからで、純の大好きだった声は、今は出せそうにない。

オーディションに合格した私が流したのは、嬉し涙ではなく、悲しみの涙だった。

あの日から、舞台上に上がる時には、私は必ずこの携帯電話を持っていく。もう古くて誰も使わない携帯電話だけど、私にとっては何よりの宝物。

その着信履歴には、『非通知』の三文字が、今でも大切に残っている。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9774b/>

---

非通知

2010年10月8日15時30分発行